

機械翻訳を介しての外国語と国語の横断的学習に関する研究

成田潤也（神奈川県教育委員会教育局支援部子ども教育支援課 指導主事）

1 研究の目的と研究課題

本研究の目的は、高性能の機械翻訳が「あって当たり前」のインフラになる将来を見据え、外国語と国語の横断的教育の可能性を検討するとともに、小学校教育における外国語教育の価値および位置付けについて考察することである。具体的には、以下の研究課題に取り組みながら、小学校段階からできること、すべきことを模索する探究型の研究で、2つの授業実践とその考察から成る。

- 研究課題**
- ①機械翻訳技術の向上を前提にした場合、外国語教育が果たす教育的意義は何か。
 - ②研究課題①の意義を満たすような、小学校外国語教育の指導内容とはどうあるべきか。
 - ③外国語教育と国語教育は、同じ言語の教育として相互に影響を及ぼすか。及ぼすとしたら、それは小学校段階においてはどのようなものか。

2 授業実践①

神奈川県内公立X小学校の第6学年2学級73名に対し、2人に1台の携帯翻訳機を用いて、実際に外国人指導助手と会話する等の活動を通して、「適切な翻訳を得るには、どのような日本語を入力すればよいか」、「機械翻訳を使いこなすためには、どのようなことに気をつければよいか」等について検討する実践を行った。実践は以下の5段階で構成された。括弧内は、各活動を行った教科・領域等を表しており、当該校の教育課程外の余剰時間が充てられた。

- 第1段階 機械翻訳の自由試行（外国語活動）
- 第2段階 機械翻訳でできること／できないことについての検証（有志による家庭での取り組み）
- 第3段階 機械翻訳されやすい言葉／されにくい言葉についての検証（国語科）
- 第4段階 機械翻訳を使って、実際にALTと会話する活動（外国語活動）
- 第5段階 学んだ内容を、ラップブックにまとめる（特定の教科の時間ではなく、随時）

3 授業実践②

神奈川県内公立Y小学校第6学年の2学級の児童65名に対し、修学旅行先の日光東照宮にて、外国人観光客を相手に担当した事物（「想像の象」、「眠り猫」、「陽明門」、「本殿」のいずれか）についての解説をするという実践を行った。15の活動班それぞれが1台の携帯翻訳機を携えて、日光東照宮に來訪した外国語話者（英語話者とは限らない）に対して、予め話し合いで決めておいた境内の事物について自分たちなりの説明を試みた。

4 結果と考察

授業実践①の一連の学習を通して、児童らは、機械翻訳の使い方に習熟するのみならず、その長所や短所、適切な使い所、「機械翻訳されやすい日本語／されにくい日本語」の特徴などを体験的に理解することができた。それぞれがまとめたラップブック形式の「機械翻訳使用マニュアル」には、各々の学びの過程が集約されていた。授業実践②では、児童らは、機械翻訳を補助に用いながら、様々な外国語話者とのコミュニケーション活動を成立させることができた。児童らは、外国語話者とのコミュニケーションに対する心理的なハードルが下がったと感じただけでなく、機械翻訳に頼らないでもコミュニケーションを図ってみたいという思いを強くしていた。本研究から示唆されることは、以下の通り。

- 機械翻訳を介することで、外国語学習と国語学習が相互補完するような学びが可能になる。小学校外国語教育は、単に英語のスキル習得のみを目的とせず、国語教育と連携して豊かな「ことばの学び」を促進することに意義を見出すべき。
- 機械翻訳使用は外国語学習の動機づけを奪うどころか、適切に使えば対人コミュニケーションの機会を促進し、むしろ外国語を学ぶ意欲を高める。

5 今後の展望

一般転用性を高めるため、より多くの学校現場において実践①および実践②の追試、または、これらに準ずる同趣旨の実践を行い、同様の効果や成果が得られるか実証した上で、機械翻訳を用いた授業プランとして確立し、提案したい。